

第18弾
Vol.3

知っておきたい がん医療

最前線

主催/静岡新聞社・静岡放送 共催/県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館 特別協賛/スルガ銀行

静岡がんセンター公開講座 2021「知っておきたいがん医療最前線」(静岡新聞社・静岡放送主催、県立静岡がんセンター、三島市、長泉町、裾野市、函南町、清水町、三島市民文化会館共催、スルガ銀行特別協賛)の第3回配信(事前登録制)がこのほど行われました。第3回は県立静岡がんセンター化学療法センター部長の村上晴泰氏が「肺がん薬物療法の最新治療」、同センター研究所・看護技術開発研究部長の北村有子氏が「医療情報を得て活用するために～患者向けがん薬物療法説明書の紹介」と題し、それぞれの講演をネット配信しました。その概要をまとめました。

(企画・制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局)



医療情報を得て活用するために ～患者向けがん薬物療法説明書の紹介～

自分で医療情報を集め考えるときは、漠然と調べずに「何を

何のために調べるか確認

静岡がんセンターは理念の一つに「患者家族支援」を掲げ、患者・家族支援研究部と看護技術開発研究部を設置しています。この二つの部署は患者さんご家族の暮らしや療養に関わる情報支援を行っています。当研究部ではがん薬物療法を受ける患者さん向けに説明書を作成しています。

医療情報を集めて考えると、患者さんの情報を一番多く持つのは担当医です。まずは担当医からの説明内容を一番に理解してください。説明が分からない場合は、積極的な質問や確

認

知りたいか、何のために調べるのか」を確認しましょう。治療方法の特徴を理解したいのか、副作用の見通しを知りたいのか。そして調べた医療情報はどのように活用したいのか。重要なことです。

「処方別がん薬物療法説明書」とは

「処方別がん薬物療法説明書」とは

次に、当研究部が2017年から取り組む「処方別がん薬物療法説明書」を紹介します。これは、がん薬物療法(抗がん剤治療)を受ける患者さんやご家族向けに、使用する薬の組み合わせや病気の種類別に、医師、薬剤師、看護師が説明する内容を一冊にまとめたものです。消化器や呼吸器など100種類以上の説明書があります。説明書は当院のホームページからPDFでの閲覧、ダウンロードも可能です。

患者さんからは「食欲不振の内容が具体的に参考になった」「どんな症状が出たら病院に連絡するかわかりやすい」「情報

量が多く、すべてに目を通すのが大変」などの声をいただいています。

説明書の活用として、まず「知る」ことに重きを置いています。治療の目的、治療期間、点滴スケジュール、現れやすい副作用の一覧などを載せています。第2段階は「実行する」です。治療前から予防策としてできる方法を紹介します。各副作用のページは「治療前」「治療開始後」「症状が現れたら」など見出しをつけ、時期に合った行動が、イラストなどでイメージできるように心掛けています。

「振り返る」です。振り返ってみて自分の体調変化をつかみ、次に生かします。例えば「〇〇は食べられず。点滴をして数日は動けるようになった」といったように、日常の行動の調整ができます。

当研究部では患者さんやご家族の視点を大切に、よりよい情報支援に努めていきたいと考えています。



県立静岡がんセンター
研究所・看護技術開発研究部長

北村 有子 氏

1998年大阪大学医学部保健学科看護学専攻卒業。2005年大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻修了、博士(保健学)。大阪府立病院、大阪府立大学看護学部勤務を経て、06年より県立静岡がんセンター研究所(患者家族支援研究部)、12年より現職。専門分野はがん看護、療養支援に関する研究。

肺がん薬物療法の最新治療

肺がんは組織型(非小細胞肺がん・小細胞肺がん)と病期(がんの進行程度)によって治療方針が異なりますが、多くの患者さんが抗がん薬による薬物療法の対象になります。

薬によって異なる副作用

がんは正常な細胞の遺伝子が傷つく遺伝子異常で発生します。遺伝子異常が起る原因には加齢、喫煙、飲酒、紫外線、一部のウイルス感染などが挙げられます。国内の状況を鑑みると高齢化が進んでおり、がん罹患(りかん)者数の増加が予想されます。がんの治療は手術や放射線療法のほか、薬物療法が行われます。当院にはがん患者さんの薬物療法を行う外来化学療法センターがあり、昨年度は2万9247件の治療が行われています。

治療効果には大きな違いがないため、副作用を鑑みて治療を選択していました。近年は、シスプラチンを使用する場合も優れた制吐療法が開発されたため、吐き気に関してはシスプラチンを選択しても以前より楽に治療を受けることが可能になっています。

現在では、EGFR以外の分子標的とした薬剤も複数使用可能になっており、肺がん細胞の遺伝子を事前に確認して検査結果に見合ったキナーゼ阻害薬を選択する治療戦略が積極的に行われています。このような取り組みによって高い治療効果が期待できるようになっています。残念ながらキナーゼ阻害薬

の細胞障害性抗がん薬と比較し

肺がんの治療は多岐にわたり、複雑化しています。皆さまもご自身の治療を考える際には、主治医とよく相談し、納得のいく治療を受けていただきたいと思います。



県立静岡がんセンター
化学療法センター部長

村上 晴泰 氏

1996年広島大学医学部卒。99年国立がんセンター中央病院内科レジデント、2006年静岡がんセンター呼吸器内科副院長、10年同院長、15年通院治療センター長兼任、17年化学療法センター部長兼任。日本内科学会専門医、日本呼吸器学会専門医・指導医、がん治療認定医。専門は肺がん薬物療法と新規抗がん薬開発。

分子標的薬にシフト

現在、肺がん薬物療法の主役はシスプラチンなどの細胞障害性抗がん薬から分子標的薬にシフトしています。分子標的薬は、がんの増殖や転移に関与する分子を治療標的とした抗がん薬であり、肺がんではEGFRという分子を標的とした内服薬のキナーゼ阻害薬が2002年から使用可能になっていました。この薬剤は一部の患者さんには非常に高い効果が得られますが、患者さんによっては従来の細胞障害性抗がん薬よりも低い効果しか得られないことが問題でした。その後の研究により、肺がん細胞の遺伝子解析を行うことで、キナーゼ阻害薬の治療効果を予測できることが明らかになってきました。

がん免疫療法

続いてがん免疫療法を紹介いたします。2014年に免疫の不活性化に与する分子を標的とした免疫チェックポイント阻害薬が、現在肺がんを含む多くのがんに対して使用されています。当院の外来化学療法センターにおいても、昨年度は4511件の免疫チェックポイント阻害薬による治療が行われています。肺がんでは、前述のキナーゼ阻害薬が適応とならない患者さんでは、免疫チェックポイント阻害薬による治療が検討されます。そのため、外来化学療法センターにおいても免疫チェックポイント阻害薬による治療を受ける肺がん患者さんは年々増加しています。免疫チェックポイント阻害薬は従来の細胞障害性抗がん薬と比較し

の対象とならない肺がん患者さんも多く存在します。現在、遺伝子情報に基づいたがんゲノム医療をさらに進める試みが、肺がんを含めたがん治療全体で行われており、静岡がんセンターも「がんゲノム医療中核拠点病院」に指定されています。

【事前登録申し込み方法】

問い合わせ: TEL 055(962)6520

- ①郵便番号・住所 ②氏名 ③生年月日(西暦) ④年齢 ⑤性別 ⑥職業(学校名) ⑦電話番号 ⑧FAX番号 ⑨メールアドレス ⑩視聴方法(パソコン、スマホなど)を明記し、下記の静岡新聞社・静岡放送 東部総局にお申し込みください。1回だけの受講も可。

<はがき> 〒410-8560 (住所不要)
静岡新聞社・静岡放送 東部総局「静岡がんセンター公開講座」係
<FAX> 055-962-6752 <Eメール> toubugyoumu@shizuokaonline.com
※FAXとEメールは件名に「静岡がんセンター公開講座」と記してください。

次回の配信は12月11日(土)13時~予定です。 ※受講料無料